

聖書:ルカの福音書6章1～11節

説教:人の子は安息日の主です

はじめに

取税人レビはイエスに「わたしについて来なさい」と声をかけられ、すぐにすべてを捨ててイエスに従う決心をし、そのことがよほど嬉しかったのでしょうか、イエスのために盛大な宴会を催します。それを見ていたパリサイ人は、「なぜ取税人や罪人と一緒に食事をするのか」と非難し、「私たちは定期的に断食しているのに、あなたがたは断食をしないで食べたり飲んだりしている」と言って不平を言います。

それに続く今日の所では、まず安息日に弟子たちが穂を摘んで食べたことと、やはり安息日にイエスが片手の萎えた人をいやしたこと、この二つが出てきて、ここでもパリサイ人が何かを言っている。今日はまず、この二つの事からについてパリサイ人がどのような異議申し立てをしたのかを見てから、それに対してイエスはなにを語ったのかを見る。そんな順番で進めます。

1 パリサイ人が教える「安息日」

1) 穂を摘んで食べてはならない

まず一つ目。1、2節。「ある安息日に、イエスが麦畑を通っておられたときのことである。弟子たちは穂を摘んで、手でもみながら食べていた。すると、パリサイ人のうちの何人かが言った。

『なぜあなたがたは、安息日にしてはならないことをするのですか。』」

誤解しやすいことですが、ここは他人の畑で勝手に穂を摘んだことが問題だったのではありません。福祉制度が整っていない社会の中で貧しい人たちが生きられるようにと、申命記23章25節に「隣人の麦畑の中に入ったとき、あなたは穂を手で摘んでもよい」と定めていました。弟子たちはそれに従っただけですからその点で問題ない。ここで論争となっているのは出エジプト記20章10節に出てくるモーセの十戒の四番目の戒めに関してです。「七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはいかなる仕事もしてはならない。」畑で穂を摘むことは仕事にあたるので、安息日規定に違反する。これがパリサイ人たちの言い分でした。

2) 人をいやしてはならない

二つ目の、安息日にイエスが右手の萎えた人をいやしたこをもって、パリサイ人がイエスを訴えよ

うとしたのも、これと同じ理由です。いのちに関わるような病気や怪我は別にして、そうではない病気の治療は労働とみなされるので安息日にはしてはいけない。こう考えていたのです。

嘘のような話に思うかもしれませんが今も超正統派のユダヤ教徒は安息日規定を厳格に守っているようで、新聞にこんな記事がありました。記者がイスラエルに行ったときに夕食を食べてホテルに帰る途中、いかめしい顔をした男性に呼び止められて「ついてこい」と言われ、おそろおそろついていった。マンションの中に入るとお前はエレベーターで〇〇階まで行けと指示し、男は階段を昇っていく。そして自分の部屋の前に来てこう言った。「ブレーカーが落ちたので入れてくれないか。」そのとき記者は、この男性がユダヤ教徒だとわかって納得した。そういう記事でした。

2 イエスが教える安息日

1) ダビデがしたこと

律法を守ろうという熱心さはすばらしいにしても、パリサイ人にはやはり問題がある。弟子たちが畑で穂を摘んで食べたことに関して、イエスはこう説明しています。3、4節。「ダビデと供の者たちが空腹になったとき、ダビデが何をしたか、どのようにして、神の家に入り、祭司以外はだれも食べてはならない臨在のパンを取って食べ、供の者たちにも与えたか、読んだことがないのですか。」

このことは第Iサムエル記21章1節以降に書かれていて、サウルの手から着の身着のままのがれて来たダビデは、食糧がなくて困っていたときに祭司アヒメレクの家を訪ねてパンをもらい、ダビデはそれを一緒に連れて来た部下にも与えるのですが、そのパンというのが祭壇にささげられた物だったので本来ならば祭司しか食べることができない。しかし、緊急の場合だからと言うことで、ダビデも他の者たちが食べても大丈夫だった。そう言う話しです。パリサイ人ももちろんよく知っている。

2) いのちを救う

これは何を言いたいのか。それはまた後で話すとして、その前に二つ目のこと、右手の萎えた人のことを見ます。イエスは9節でこう言います。

「あなたがたに尋ねますが、安息日に律法にかなっているのは、善を行うことですか、それとも

悪を行うことですか。いのちを救うことですか、それとも滅ぼすことですか。」そして、「手を伸ばしなさい」と言われると、手が元どおりになっていく。その結果、パリサイ人は怒り出して、イエスをどうやってなき者にしていくかを相談していく。

どうしてこんなことになっていくのかと不思議に思うかもしれません。このことがよくわかる例を挙げます。小学校で掲げられている標語に「廊下を走らないようにしましょう」というのが昔あって、ホームルームになると、小澤君が廊下を走ったと告発されて先生に叱られる。そういうことがよくあった。でもよく考えると、廊下を走らないと決めたのには、もともと生徒がけがをしないようにというすばらしい目的があった。ところがいつの間にか、規則を守らなかったから先生に告げ口するという話しになる。パリサイ人がやっているのはまさにこれです。

そもそも安息日は何のために設けられたのか。働き過ぎてからだをこわしたり、心が壊れてしまわないように、仕事中毒で家族がばらばらになつたりしないように、人の弱さを知ってくださる神があらかじめ配慮して与えてくださったルールだった。

安息日に畑で穂を摘んで食べたことが問題だと言うけれど、ダビデは祭壇にささげられたパンを食べてよかったのです。ならばお腹が空いたら安息日でも穂を摘んで食べるのは当然ではないか。病気で苦しんでいる人がいたならば、安息日でも治す。手続きがどうのとか、理屈をこねる暇があったら、人のいのち救うのが先である。それがイエスの言いたかったことです。

3 わたしの好む断食（イザヤ書58章6, 7節）

1) 「しない」パリサイ人、「する」イエス

これでパリサイ人のどこが間違っていたのかが理解できたと思いますが、このことを別の視点から見るともできます。前回、パリサイ人はこう言っていました。「イエスとその弟子たちは罪人と一緒に食べたり飲んだりして、全然断食しようとしなない。」今日のところでは、「安息日に麦の穂を摘んではならず、片手が萎えていたとしてもいやしてはならない。」これらの共通点はなんですか。食べない、いやさない。キーワードは「しない」です。

一方イエスはどうか。罪人といっしょに食べたり飲んだりしています。麦畑で穂を摘んで食べています。片手の萎えた人が目の前にいればいやしてい

く。これらの共通点はなんでしょう。キーワードは「する」です。

同じ聖書に書かれている安息日、あるいは律法の解釈を巡って、いっぼうは「してはいけない」と言い張り、もういっぼうは「する」と言うのですから、真正面から衝突するのは当然と言うことになる。

2) 悪の束縛を解く、飢えた者にパンを与える

もしかして、イエスは聖書に書かれていないような新しいことを言い出したので、ぶつかったのか。そんな疑問も湧いてくるかもしれない。そうではありません。イエスは、すべて旧約聖書に従って語っている。その一部をご紹介します。イザヤ書58章6, 7節にこうあります。「わたしの好む断食とはこれではないか。悪の束縛を解き、くびきの縄目をほどこき、虐げられた者たちを自由の身とし、すべてのくびきを砕くことではないか。飢えた者にあなたのパンを分け与え、家のない貧しい人々を家に入れ、裸の人を見てこれに着せ、あなたの肉親を顧みることではないか。」

前回の箇所では「断食」のことが問題になり、今日の箇所では「安息日」が問題となっています。それで、読みましたイザヤ書の「断食」というところを「安息日」に入れ替えてみてください。「主の好む安息日とはこれではないか。悪の束縛を解き、くびきの縄目をほどこき、虐げられた者たちを自由の身とする。飢えた者にパンを分け与えること。それが主の好む安息日である。」そのままぴたりです。イエスは、イザヤ書に書かれているとおりのことを語っているだけなのです。

4) 「人の子は安息日の主です」

最後に考えます。5節。「人の子は安息日の主です。」もっと説明してくれれば良いのですが、イエスのことばはいつも暗号のようでわかりにくい。安息日を定めたのは主イエスである、とも読めますし、安息日の本当の意味をご存じですとも読める。

ではこの方はただ安息日を定めただけなのか。ただ、安息日の意味はこうですと解説しただけなのか。ちがいます。安息日が設けられた本来の目的を実現するために、この方ご自身がパンとなっていく。罪人を解放するために十字架に向かわれる。それはおわかりでしょう。

では、十字架の処刑はいつおこなわれたのか。ルカの福音書23章53, 54節「彼はからだを降ろして亜麻布で包み、まだだれも葬られていない、岩

に掘った墓に納めた。この日は備え日で、安息日が始まろうとしていた。」

安息日の間、主はどこにおられたことになるか。墓の穴です。そうすると、「人の子は安息日の主です」の意味はどうなるか。わたしは安息日を支配している神です、という意味とも取れますが、同時に、安息日にご自分が墓に葬られることを、言おうとしていたことになる。

パリサイ人は、たとえ目の前に困っている人がいても、病んでいる人たいても徹底的に何もしない。けれどもイエスは、それとは反対です。たとえパリサイ人が腹を立てて怒鳴りちらし、殺意に燃えてといきり立とうとも、イエスは人のいのちを救おうとされ、最期はご自分のからだを私たちのために分け与えてくださいました。罪ある私たちのために、このようにしてくださる安息日の主とともに今週も歩んでまいります。